

# 山谷

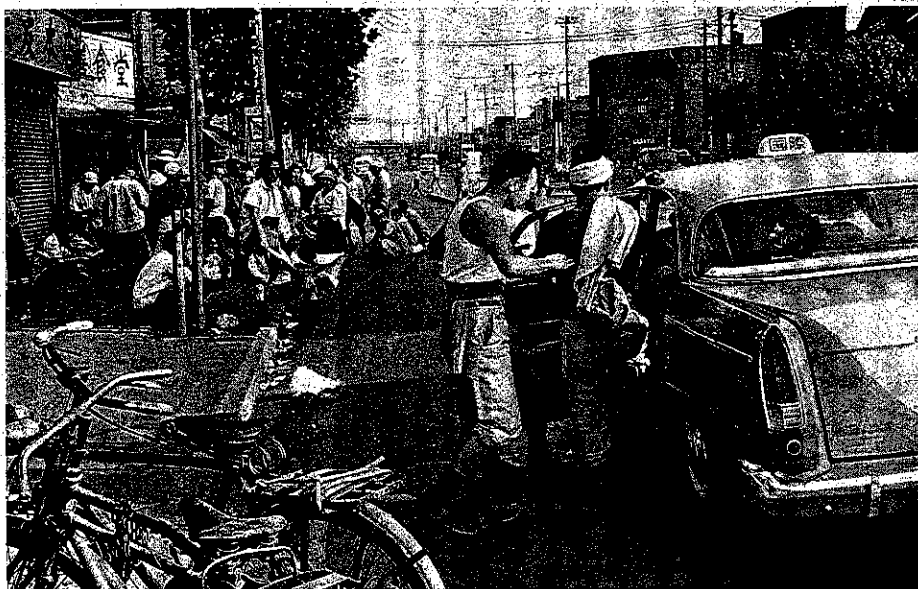
台東・荒川の両区にまたがり、簡易宿泊所が密集する「山谷地区」。かつての「労働者の街」は活気を失い、今では多くの人が生活保護で暮らす「福祉の街」となった。だが、山谷を支える人たちの思いが変わることはない。



労働者の生活支援を行う都城北福祉センター(当時)で、1975年から約20年にわたり医療相談員を務めた武蔵野市の宮下忠子(78)は、1万人以上の労働者と出会い、彼らと街の姿を記録して多くの本を出版した。

「(最寄りの南千住駅の)ホームを歩きながらその群衆に驚いた。ジャンパーに作業ズボン、キャハンに地下足袋のいで立ちの人々が(中略)今日の職を求めて歩いていく。午前5時40分の山谷にこんなにも働く者の活気があったとは」(77年出版の「山谷日記より」)  
「寒いなかを67歳の病身

## 今日の日 得て生き抜く



タクシーに相乗りして山谷から建設現場に向かう労働者たち。翌年の東京五輪に向けて、都内各地で建設ラッシュが続いていた。(1963年8月撮影)

### どん底知る男たちに絆

のTさんは1円もなく神田のほうから歩いて(城北福祉)センターにきた。「大変でしたね」という私に向かかってTさんは、「いや、戦争中の行軍の辛さより野宿をして歩いているほうが楽です。人を殺さなくていいですから」といった。私は絶句した。(95年出版の「山谷曼陀羅」より)



「山友会」の代表ルポ・ジャン(71)の写真だ。ジャンはカナダ東部ケベック州の山中の村で育った。72年にキリスト教の宣教師として来日し、84年に発足直前だった山友会を知り、炊き出しを手伝うようになった。



光照院にまつられている「あさくさ山谷光潤観音」

になった。朝から酒に酔い、道端で寝込んでしまう人。ケンカをして血だらけになる人。捨て鉢な行動をとる男たちは、家族との不仲や借金苦などから「居場所をなくしてみんな孤独だった」。親しくなり身の上話を聞くうちに、ジャンは男たちとの絆を感じるようになった。



「命の水(酒)」を滴らせながら「お酒。指先から酒。指先から」と言えは(37)写真

「日本ですら僕も孤独だった。山友会に来てみんなとしゃべって、ぶさけあつて、いたずらもして。ここでは孤独を忘れられた」山友会では昨年、亡くなった元労働者たちが入れられる共同墓を近くの寺に用意した。「生きても一緒。死んでも一緒」。ジャンは自分の遺骨も共同墓に入れてほしいと望んでいる。  
(敬称略、小林雄一)